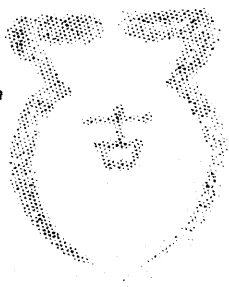
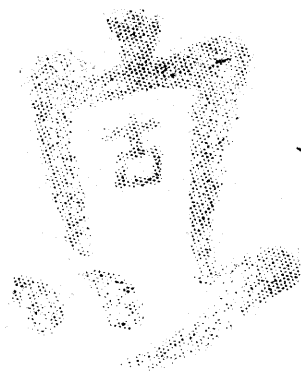


博多小女郎波枕



博多小女郎波枕

上の巻

船を出しやらは、夜深に出しやら、帆影見るさへ氣にかかる。長門の秋の、夕暮は歌に詠むてふ門司が関、下の関とも名に高き西國一の大漆、北に朝鮮釜山海、西に長崎薩摩湯屋和蘭の代物を、朝夕夕なに引受けて千艘いづれは入舟も、日に千貫目萬貫目、小判走れは銀が飛ぶ。金色世界も斯くやらん。地沖に何待つ松垣造り十四五及の廻船に、船頭舟子は襦袢着て足踏延す舵枕、四五人の乗衆ども稽の上につくつく、そよと波首船影に、心を付ける蚤取り眼物茶臼顔も煩すいたる。中に頭の毛利九右衛門、生れは長崎國訛り、詞コリヤうんたち、まだ市五郎三藏が舟は見えいろ、心許をかはい。心たまぎりや夜がとくなつて、身だまんどりともせない。首尾よからうは筑前さなへ此の舟廻し、柳町のしやうく、ていごも請出いて、上方さなへ突走る。表の向借切つた上、唐人、船頭が馴染筑前迄棄せなけりやならぬといふ。仕果せにや筑前へはゆかぬ船門出よか、よか便り

ヤレコリヤ氣にかかる

聞かふはい。表の衆衆呼うでわたい吐きもして終らさん。地あつと答へて
平左衛門呼びにおるれば其の跡は、鬼とも組むべき男ども編片取つて敷か
すやら、茶出しに唐茶摘み込む、注出す色は薄けれど頭を頭と敬ひし、禮
儀も仲間の花香なる。地表の衆衆小町屋惣七差得惣惣都育ち、呼はれて
櫓の割膝し、桐船頭馴染に押付けての便船、御尋ねなくとも御挨拶申す筈
無禮御免と手を突けば、ア、堅い、同船致し一つ釜の食事喰べるは一
門同然、サア御手上げられ、此の五人は我等が仲間、他事なう吐し明かす
中、近付になつてお吐しなされ。斯く申す某は長崎者、九右衛門と申して
そつと致した唐商売是は同國弥平次と申すに、次は上方小倉屋傳右衛門波屋
仁左、其許を呼びに参つたは、阿波の徳島平左衛門と申して、雙月代致さる
。船中の事故き心措かたとお頼みなされ、して其許は何處何方、我等も
生國長崎、伴の時分親に連れて生れ所を引越し京住居、父が名は小松屋惣
左衛門、同名惣七と申す者、売買のため筑前へは毎年の下上り、どなたも
船中平かい御免、地よいお近付求めしと禮儀仕舞へは膝崩れ、詞直せば
寐匍匐はや千前の馴染程心解けたる朝霜の、奥底もなかりにける。地
九左衛門顔色打解けて、桐船中の淋しさ物語り程伽になる物はな。俺と

もが二十七の年、薩摩者と喧嘩した吐、喧嘩やなかはん聞かつしやれ。九月の七日九日は氏神の祭、本踊りいろ唐子踊いろ、見事なことはん、本無善町といふ所を御器に一二杯、肝の束へ諸白を引かけた薩摩二歳、肥満男であつたはん、諏訪へ踊見がい行く行建ひに、長か赤鯛の小錨がくさの俺もが腸腹さなかへ當るが最後、引撮んで壁へかいなすらうと思ふて、小尻を逆手にやつくるり、それはく見事な事であつたがなう、他國者に扱けられては國へ歸つても成敗、死ぬる命は何處でも一つと、二尺八寸ひき抜いた、コリヤン、ほたゆるなと又引捲いで扱けたがの、角のある溝石でくさ、頭の顛骨が粉々微塵に打割れた、ヲ舟では割れたといふは忌々しい、頭の顛骨が走つたく。血が走るいろ涙が出るいろ、頭抱へて雇人に擔はれ、小宿さなへ往んだがの、今で思へはむぶうらしけに、そがいにせでも大事なかつたん、上方衆は氣がよかけん、こがいな事は、あるまいと仕形交りの高吐、皆安閑と聞きゐたる。詞サア、詞京のお客、地お吐しなされ。次第々々に所望せん。上方は色所定めて深い譯がある、お吐しあれと口々に乗すれは乗つてされはく、親恕左衛門吟味強く、京大坂では懸半文我が物で我が儘ならず、毎年の筑前通ひ幸に柳町の小女郎とは、抑よ

より互に逆上り、是非當年は請出して、女房に持たるゝ合點持つ約束と、
半分聞いて、おつしやるな聞く迄もない、我等も博多へ参る者此の一座
五人が、小女郎殿の身請の幫間、地大盡くわつとおはづみと毛刺が起きて
膝立つれば、ようく身請の大盡様こりや誰が大盡を、小女郎様の大盡と
一座がはらりと取廻し、座輿も過ればむつとして、颯るか但し侮るかど
、心くるく喘たぐる胸を押へて、名へん名へん、今朝から風引き頭痛致
す。跡の吐は後刻々々、何方も是に、と挨拶し、思ひ悩みつ之煩ひ新う
下へ這下るゝ。地身請する程内證が暖かで、風引いたとは何處やら足らぬ
和郎さうなど、悪口苦口小倉口より、波押切つて来る早船此の船目當の一
文字、真黒になつて、漕漕付けたり。地九右衛門初め立駈お、詞ヤア三藏
市五郎、首尾はく、近年の柏子よく、荷物受取り金波し彼方も機嫌此方
も仕合、荷教手形に引合せ波しませうと聞く嬉しさ、船頭起きよ、地舟子
も来い荷物請取れまつかせと、心も勇む虎の皮百五枚、仕合せすれば氣の
薬、海老手のお参五箱で三十斤、仕損するは手廻しの蝦子七櫃二百本、船
から船へ移しの麴香四十箱、何と遠見に見付けられはせなんだか、けむな
い事いはしや縞綴が十五箱、さりながらむりやうの縞子が十二九、世話入

つた漆七桶、運の強いは一昨日の夜の月影、照りのよい鼈甲百斤、地まつ斯
う仕済し帰りました。天地の恵み明星程な珊瑚珠が八十粒、手形の表是迄
渡しました。此の一通は來夏舟の割符、迎船にお出なされとの言傳と。地
渡せば取つて押載き、手柄功名休みめされ、二人の衆にも酒をませ、詞お
目出度たにお頭様、御褒美をしっかりと。地御酒も祝うて下されうと、オクリ
答元船に乗移る。地九左衛門相仕等招き寄せ、小聲になつて何れも見ずや
詞荷物を船へ積む折から乗合の京の奴、巨立より顔差出し、合點行かぬと
思ふ面付キ、生けて置いたら頬けた叩き、後日の難儀見る様な、切殺しては
大事の門出血を見るが忌々しい。縊殺して海へ投り込め、地下入奴もあり
さうな油断するなまつかせこんだ、皆の衆抜るな心得たと、鉢巻袴尻塞は
腕骨試し力試し、合の袖際ハ小楯にて時今を窺へ、サア來いと、櫓下るるも
忍び足、處は沖津汐風の外は一味の船の中、聞く人もなし見る人もなし、人
は知らどと思ふこそ、結句身の上知らずなり。下人が喚くまつかせ聲、
櫓の上へ躍り上るを追つ、結句ハ彌平次傳右衛門二人が中に取巻いて、宙に
指上ハは、あわいなと、投り込む波の哀れや下入底の水屑となりハにける。地サ
ア一人はしてやつた。詞惣七奴が見えぬ探せ、地コリヤ、あに傳馬

込にといふ聲に、惣七水裃取つて狂ひ出で、詞ヤア海賊奴等、様子一々見届けた、地死ぬるとも一人死なうかそつほう滅多打立つる。後へ廻つて市五郎、隙を窺ひ攫付けは取つて扱は、扱はられながら受首を一つかき取り、眞逆様にすでんどう、と響く波音に捲りかけ、大勢かゝつて、（だんがのうらた）らほ、邊も知れぬ海の中眞逆様に打込んで、詞サア仕済した目出度い、と笑ふ聲。惣七はつと心付き、見れば傳馬の中々に、物音せは悪からんと、纒解いて櫓を押立て、悪魚毒蛇の口よりも適れ難き場を適れ、一及ばかり漕出で、と、皆々骨折々々、詞惣七、是から禮申す、（此の返報は、重ねて）と、心急は、あいさつさ、あいや選は、傳馬にあり、押すや櫓舵の続くだけ命、限り、と、（三）いひきにて、すいぢや、あんならや、すはひすふいてう、ひいたらこはいみさいはんや、さんそ、うわうわう、詞ア、おきや、なう、欲市殿其の拍子では踊られぬ、銭太鼓の三味線知らずは知らぬと、頭から、（下）うたが好い。長崎の伊左衛門様とは違つたもの、もう、踊らぬぞや、それ藝が上るものか、三味線弾き止むまでサア、踊りやと、いひければ、なんぼでも踊らぬ、三味線やめて此方も正確か、跛ひかしやれ、何ぢや、跛ひけ、盲目と思ひ悔むな、地目二つ持つた汝等に、いで物見せんと、三味線

振上げ フシ 声を、あてどに、追廻す。地亭主奥田屋四郎左衛門台所から立出で
 詞こりや何ぢや、欲市 ゴ 嗜め、大人氣ない、忝どもも跪いたら遺手に告げて叱
 らすぞ、ヤイ重之丞。今日は小女郎様の母御の十三年忌、追善のため身揚
 りして、小女郎 オウ は、眞の間に經念佛してござるでないか、附いて居る大夫様
 の親御の事、線香でも立てうと思ふ氣はなうて、盲目相手に何事ぢや、忝
 々妾ども二人錢太鼓稽古して居たりや、欲市の三味線で、邪繁しやりんす、
フシ 眞の錢太鼓が猶悪い、地物の稽古も時がある、奥へ往て附いて居よ、二人
 ながらとつと往け、詞こりや欲市、表の二階に宰付の涼様が來てござるか、
 見舞うたか エ 地やつらや一角せしめんと、人の巾着當にして、貰はぬ先の
 締括り フシ 宰付の客へと、取りに行く。百年 ヒト 経ねぞ、哀へは、今身の上(17) に小
 松屋惣七、下の関の大難に命、一つを拾ひ得て 長 博多へカ がれ着きしかど、
 小女郎が情忘られず オウ 悲しき、風の吹立つる、木 フシ 柳町には來たれども、
 金銀なけれは肩すほり己れと、心奥田屋の、門を視、見 ハ 行み居る風
 情。内には乞食と尖り声、詞餘り物は遺つて了うた、通りや、フシ と慳
 貪なり。地扱ははや物貰ふと人目には見ゆるよな、成り果てたり仕なした
 り、此の風俗で小女郎に逢ひたいというたりとも聞入れど、聞入れから

小女郎が恥、思ひ切つた顔見まいと、立歸る後より、ヨ、待りや、と重之丞、詞コレ今日^{キョウ}は太夫さんの志の日に當り、施し一錢と、差出しなから、ハア、此の乞食は絹布^{キヌフ}を着てゐると、顔差覗いてヤアお前は京の惣七さん、なう太夫さん惣七さんの乞食に成つてご心^{ココロ}したと、存ははれば搦伏つて逃ぐるを往なさぬ持たんせと、帯に縋つて止むる間に、家内も驚き駈け出づる小女郎は表に走り出で、笠かなぐつてほんにさうじや嬉しや、よう來て下んした、此の有様はどうぞいのと、何の様子もスエテ聞かぬ先から泣く涙。詞コレ四郎左様奥へ連れまして咄したうござんす、地如何にも、お馴染の惣七様、御用あらは御意なされと亭主が情に打連れて、オウ入るより早く廻り付け、恋しゆかしはいはいでも知れた二人が仲、此のお姿は親御様の御勘気でも受けての事か、様子がなうては叶はぬ筈、お前の心に此の小女郎はまだ、傾城ぢやと思ふてか、此の身は廓^{クワク}に居るとも心は疾^{ハヤ}から、女夫そや、肩裾結び手を引いて人の戸口に縋るとも交した詞達やせぬ。詞今日は母様の十三年の命日、お前に逢うたは親達が、あの世から手を取つての引合せ、地女房健に暮したかと一口い小事ならぬかと、眞実見ゆる涙の目男もはら

声顛ひ、詞小女郎息災にあつたの、一年ぶりに顔を見て、よい姿も見

せよい事も聞か^ズことか、聞^クいてたも、毎年^ノの如く諸色を仕込^ンで下る所
下の関にて海賊船^{フネ}に來合せ、家來は眼前海へ沈^メれせ、我が命さへはふは
ふの仕合にて此處まで逃^ケのび、商売の荷物衣類は其儘船に捨置き、肌
一錢貯へなけれは二度に二つ^ノの下着を売^ッて、今日迄の露の命を繋^ギしそ
や。地此の度^ノの下^リには請^出し、女房に持^タんと^ノの深き契約、其の金銀も人
手に渡^シ、詞^ヲを述^ケへ望^ミを叶^ヘぬ、我が本意な^クより、和女^ヲが恨^ミん心^ノの不
便さに、言^ハすやら親見^ニにやら、見^苦しき身も恥^ぢぢ、爰へ來て面目^ナき物語
り^ト、^{フシ}涙に声を曇^ラせり。お^およう打^明けて下^ンした。室は湧^ク物、お命さへ
あるなれは、わしや嬉^しうご^んする。わたし^シが心でお前一人は如何なと
なるおいと^しや肌寒^カろ、お顔^ガたんと細^ツた^ト、着^タながら上着^ハはと着
せ^{フシ}抱^締めてこそ泣^キ居^タる。地^地表に血氣^ノの下^モ男、大盡^様の御來臨^ト鳴
り喚^クや^レ人が來^ル此^方へ^ト、男の手^ヲを取り身^ヲを寄^セて、オ^オリ奥^ノの一^向に入
りにける。地^地客は過^ギつる海賊^{ども}も、まつ先^立つて毛剃^丸右衛門、弥平次
傳^右仁^左平^右平^左、市五三藏^{サア}ご^ざれ^と、引^キさ^する雪駄^ノの金にあ^カした衣裳
つき、各^々さる世羅^紗す^ためん、か^るさいらんけん^縮子^天鷲^絨、下^着上^着も
渡^リ物、頭^ハ日本^胴は唐^々の襟^塚、ち^くら手^くらの一^夜檢^校、終^ニ目^馴れ

ぬ出立のはえ、奥田屋に掻き込み、座敷に居流れ毛刺が諸式受込んで、巻配らし方に勿体観。亭主薄々見知りがあらう。廊の縦横十文字、昨日迄端せせりした杖々、概分限は見らるる通り、今日からは太夫狂ひ、来る途次見て置いた一文字屋の江口、丸屋の勝山同じ家の薄雲、油屋操和泉屋小倉、車屋の大磯此の六人を請出して、翌に居らるる入々の物言如、明日迄待たぬ今日の中に首尾させい。地是は賑いと四郎左衛門飛んで出づるをやれ待て、亭主が留守では興がない。云付けて呼びにやる足走書早う往て来いお吸物、大座敷も一つにせい。子供泣かすな女房どもに薬飲ませや。詞何ぢや花車が煩ふか。それ挾箱持つて来い。油断召されな人恭用ひて養生が第一地持合せたはづもうと蓋押開き一包、一つ送の大人恭一斤餘り扱出し、詞四郎左衛門は、娘が一人男が二人ごぶります。ヲよか子持だ、小さけ礼ど此の珊瑚珠、對で秤目が八匁二人の子に提けさしや礼。お娘が着る物に有合せた緞子三本編子五本、此の緋縮緬裏に好からう。地四郎左衛門恟として、詞お禮より先づ肝が漬る。何時の間にも此の様な地大分限者にお成りなされたと、問詰められ問に合ひ詞詞きついか、江戸

尚ツミルの間變ツミルく、陀夜ツミルの中山無間の鐘、撞當ツミルてた福々長者ツミルさりながら、此の鐘撞ツミルくには行法がむつかしい、長者經ツミルとて、寺に傳ツミルはる縁起の目錄ツミル聞かせたいと打笑ツミルへは、亭主ツミル横手をツミル礎ツミルと打ち扱ツミル有難いお経、我等ツミルもあつとあやかる様に、其のお経授ツミルけ下されとせがみ立てられ、地ツミル然ツミルらは聽聞ツミル仕ツミルれと何やら知ツミルれぬ懐帳ツミル、殊勝ツミルらしけに取出ツミルし各ツミルい事の嘘ツミル八百、長者經ツミルと擬ツミルへ声張り上ツミルけて読みにけり

長者經

地ツミルそも此の、無間の鐘の濫觴ツミルを尋ツミルぬれば、天堂の大金持、月蓋ツミルと名ツミルに高き、さつても吝ツミル蓄ツミルいッシ長者あり、佛ツミル曼ツミルに示ツミルさんため朝ツミルなくの頭陀ツミルの行、鉢ツミルも空耳ツミル潰ツミルし、呷ツミルとも、すんとも、はれぬ佛ツミルの方便ツミルにて、光ツミルはさながら、一步ツミル小判ツミルの山咲色ツミル、金ツミルと見るより吝ツミル蓄ツミル長者、佛ツミルの箔ツミルを剥ツミルがさんと、欲ツミルから入ツミルるる手の内ツミルを釋ツミル迦ツミルの手管ツミルに仕掛ツミルけられ、惜ツミルしや悲ツミルしや南無阿弥陀佛ツミル、此の撞ツミルッシ鐘ツミルを建ツミル立ツミルす。されは穢ツミルい長者が心末ツミル世ツミルの今ツミルに止ツミルつて、先ツミルづ初夜ツミルの時ツミルはを撞ツミルく時は、諸行無常ツミルに惜ツミルしやッシく響ツミルくなり。後夜ツミルの時ツミルはを撞ツミルく時は、生ツミル滅ツミル減ツミル多ツミルに入用ツミル知ツミルれず。寂滅ツミル入ツミルらざる鐘ツミルの聲ツミル、一文惜ツミルみの百八煩惱ツミル、此の鐘ツミルの首ツミルを聞ツミルく人は、現ツミル世

にては分限の金持未來にては、無^ク厭^ムの釜煎り期る、不思議の檀鐘を、疎かに
に、フシ撞くべからず。扱行法の次第といつは絹も袖も着る事ならず、木綿
蒲團も榮耀^{ウヱイゴウ}の至り荒蕪引い起臥の、フシ身は慣はしの奈良茶粥^{カハク}、精進漂齋
菜入らず。晝夜にたつた二度の節季は尻褌は、往來の中を、ちよこく走り、
ちよこくくくく脱けて、落ちてある物、フシ只置くな。振^コても土を、ッハリ
掴んで起きるは七つ起き。糞を取らずは金貸すな、欲しい物は買はめが徳。
月夜に夜業^{ヨナヤ}はせめが損。稼ぐに追付く食はなし、芥子を千にも割木の焚様。
必^キず灰を取る事な札。捨てる物は何にもない。鍋の煤^{スス}煙では細眉作り、
稽^{シタ}の切は委^ウの妙薬、水なき井戸は梯子の入物、鼠の尾まで籬の鞘、ナホス
指せ干せ傘^{カサ}、人に貸すな、フシ鱧魚節、播粉木播鉢砥石臼薬研まで、目にこ
そ見えぬ貸^カす度^タに、フシ滅らすに戻る例はなし。ユリさて其の外は愛嬌つき
合ひ、始末貯蓄^{チキョク}読書算盤科目の、上を見れば方圓がない、我より下を手本と
して、右の條々ナホス守るに於ては、微塵積つて山となり、長者の金言疑なし
無間の鐘とは名ばかりにて、現世も未來も背かねは自然と学ゆる福徳縁起
聽聞、あれと語りけり。地^チ否とも應とも申されぬ。世^ヨ界中が此の通りに身
持つたら、私^シ等が商売は取奥田屋とぞ笑ひける。地^チ座敷の隔ては障子一重

彼方の騒ぎひしく、小女郎が身に慙へア、ある所には、ある者かな、五人
六人の太夫達請出さう。何遣ろ、彼遣ろ、是遣ろと。地金銀財宝は塵埃。父様
や母様の貪な暮しを見た時も、能はぬ金が欲しいとは夢程も思はずして、
今日といふ今日あちらの身請が羨しく、妾や金が欲しうなりました。仕合
せのよい入を、姫みは道でフシなれども、如何な男を顔見てやと。障子
の障よりさし覗き、ヤアありや妾が近付き、まさかの時は心快りになりま
しよと、力を付けてくれた人。金借つて来やせうと進出づるを引止め。詞
近付は内證人も聞く。女郎の口から金借してと身の恥は思はずか。恥を乞
むも事によるたつた今いふ事。本月は筑後の客が私を請出すと、出口の
此渡屋と薄約束。お前の下りを月よ星よと待受けたりやこんな首尾。人手
此渡れば妾や、生きて居ぬぞや。金借つたとて返事は恥にも分らぬ事。地妾
次第と振切れば遣るも涙行くも涙、隠して座敷へ繰歩み、毛刺が側へ坐れ
ばはつと衣の沓の、四邊の人はうろ／＼と、顔を見合はず荒男俄に嗜む衣
紋付、フシ鬼が花見る風情なり。詞毛刺さん久しいな。妾や此方様へ無心
に來た、此方に大きな葛藤が出來て、急に身請をして貰はねば、ならぬ首
尾になつたれど肝腎の物がな、地かねの詞もあ刺此方の才覚調ふま

て妾が身請の成る程、金貸して下んせ、頼みやするといひければ、詞日本一の
釋様金貸して下んせとは、いひ憎い事。二言と聞かぬ。お前の用なら千両で
も萬両でも。コリヤ亭主。小女郎様も一所に身請け行きたい所へ遣ります
る。金は毛剃が飲込んだ。女郎方の見ゆる内、小女郎様惜りました。地
飲めや謠へと騒ぎ立つ。ア、待たんせ、あの障子のあちらに今、うた
大事の男が来て居さんす。連れて来て禮いはせませ程に、毛剃さん、詞
違へて下さんすな。男、冥利商、冥利虚言ござらぬ。お供なされの詞に、
そいぞ立帰る。太夫さん御出と呼ははる声。門から色の摺み取り勝山江口
大磯に、寄来る波の大騒ぎ。座敷に一杯入込んで、薄雲さん、みさを様、小
倉さん、三人はお跡からそりやこそお敵と色めいて、毛剃が連巻も現を抜
かし、顔に餘念はなかりけり。九右衛門声かけ、亭主、爰には
ちつと用がある披様方口の座敷へ。跡から見ゆる太夫方も爰へは無用、地
おつと此方へ来給へと、亭主に連れて立廻る。女郎も田金はをんとなり。
地出るも如何出ぬも如何。小女郎に引かれて惣七は、障子押明け立出づる
顔と顔、互に見合せやア。翁小女郎が馴染の男、今思ひ出した其方が事な
ぬ、汝等に逢ひたかつた。やア入はないか此奴等は下の関の。跡いはせ

むと手剃が連々も大声を生け、煩衝きかすな打殺せと、既立つる盃燗鍋の、
 轉けて疊にたぶくく。濡れから起つた喧嘩さうな。大事にはなるまい
 かと上する女子下男、うろつく顔も青ざめて、ン生きた心地はなかりけり。
 此毛剃一寸動きもせず。詞ア、騒ぐまい。此の九右衛門が思葉がある。
 弥平次。残らず女郎衆の側へ行け。跡はおれが受取つた。いやさうでない
 我々が相手になる。親仁一人心許ない。ヤア此の毛剃ひけ取る男と思ふか。
 汝等が居れば喧ましい。どつと、行けと睨め付くれば、そんなら行きます。
 地親仁次第と打連れて、オトリ表の、座敷へ出でにける。地小女郎は跡先知
 らず、惣七に引添うて二人の目許に氣を配る。詞これ若い人惣七殿。此の
 中のこと、恠へさしやれ、いやと、いはしやりや事になるや、恠へさしやれ。
 小女郎を此方へ請出すと此方の詞が反古になり、小女郎も可愛や此方々々
 と心中の立通し、女郎の口から金貨世とまで恥を捨て、の志、無にしてや
 らしやるはそりやいかい邪慥。悪い事は、いふまい、此方の仲間へ這入らしや
 れ。小女郎も此方に添はせ、五十貫目や百貫の金は取換へて、親御の息が
 かからずとも物の見事に取立てましょ。仲間が多うなる程此方は損なれど、
 運を力にする商売運弱うては埒明かぬ。此の中の様な場を通れた命、冥加分

入しゆ、アムカ
 又し、アムカ
 アムカ、アムカ

運強トクい此方コノカタ。九右衛門が力になる人と見てコレ、手を下る。仲間へ入つて、
下ふれら、詞コトはさけても居やひ腰、いやといはど切りかけん哉ヤ。気色面に、
見え透スいたり。惣七も手詰の返事仲間へ入れば家の大生命の仇。いやと
いへば小女郎を、人手に渡すのみならず命迄取らるゝ。何れの道にも死ぬ
る命、國法をや、慎むべき、小女郎にや添ふべきと、二つの心身一つに定め、
かねて居たりける。詞申しこれ惣七様、あなたニの商売は知らぬが、駕籠
に乗る人駕籠昇ノボど人、品は変れど行く道は同じ事。金も取換へ何から何迄
世話やかうとの心入れ、お身に悪い事でもなし、あつと、うて仲間になり、
早う妾と起臥を一所にしようとは思さぬか。お為にならぬ筋ならはいやと
返事をいひきらしやんせ。此方コノカタさんに添はれねは生きて居る小女郎ぢやな
い。女房メカにしなと殺しなと、いやかおうかど生ナマ先の、大事の返事でござん
する。急セく事はないぞやと、懐ハに手を差込れ、シ、此の汗わいと、鼻紙ハナシあり
だけ拭き捨てる、濡シで破るゝ人の身の、フシ嗜み難き道ぞかし。惣七はつ
と打首肯。詞得心致した、只今より仲間になり御指圖は背くまい。承り及ぶ
長崎には物の堅めに血酒飲シむとや。偽イタりでない惣七が心底、腕引いて誓
を見せんと、片肌脱ハはア、見えませんでした。又マにこそよれ何の此方に

偽あろう。攻めて益事地皆来い來いと地フシ呼び集め。詞小女郎殿嬉しか
ろ。亭主身請の惣代金何程ぞ。書付是にと差出す。追取つてさうりと読み
小女郎殿共七人の身請代金千四百五拾兩な、端金があつてやかましい五十
兩は亭主に遣る。千五百兩是受取れと、一兩二兩の七百五拾兩方目出度い
仲間入り、皆兄弟地他事なうなされ蓋へく。取おんらが在所はの、奥
山のて、うちの、でんぐりく栗の木、木の根を枕に轉寐。此の小女郎
恋する山家の品物で南無阿弥陀佛帶解いてこれごされ、抱いて轉寐、面
白いそとフシ樂しみける、地町の夜番あはただしく。詞人をあやめ法を背
いた科人が、此の郵へ入込んだと上の町から密攻め、一人も密衆外へ出る
事なりませぬ。地捕手の衆がはや羨へといひ捨て、亭主を連れ馳出づ
る、勤せぬ自慢の九右衛門始め、六七人がぐんにやりく、俄に顔色茶菜
の様にしをく、と、コリヤ堪らぬ、さうを舟へ行く道は外にないか。金の
出るには構はぬ。土の底へは這入られず、天へ昇る梯子はないか。隠義隠
笠があら欲しやと、我が身一つを片付け、フシ兼て顛ひ居る。地惣七小女郎
が手を取つて、門口に懸を配り固唾を飲んで居る所に、向か隣りかぐわた
く、捕つた捕つたと喚く声地悲しやと一同に、腰を抜かして魂の

フシ身に添うたるはなかりける。地亭主四郎左立（牛門）立歸りア、氣遣ひないく。
詞此の博多の穀町で、飛脚殺して金取つた奴、登陣の楊屋で捕へ代官所へ
引きました。此方の事ではないといへは一度に顔を見合せ、ア、有
難いやレ忝ない、可惜肝を潰したと溜息ほつとついたるは、世並の悪い老
癒に、フシニ番湯かけし如くなり。詞長居は無益惣七殿、京へ上るサア、
皆いなうく。地女郎衆は駕篑で舟場まで、一口いうても八人が亭主さう
ほと立出づる。七人一度に身請とは、聞替も及ばぬ大々盡。お一人々々
顔に書付け張付けたい。ナウ磔刑と聞くもそぞ髪嫌やく、お手柄のお名
が顯れう。顯はれるは猶氣がかり、何にもいふなと出で、行く。男自慢は
七人の衆に、顯れ 三重